

新制

人

106

学位審査報告書

(ふりがな)	たかはし そよ
氏 名	高橋 そよ
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 429 号
学 位 授 与 の 日 付	平成20年11月25日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 環境相関研究専攻
(学位論文題目)	
サンゴ礁資源利用に関する人類学的研究 ー沖縄・佐良浜の事例からー	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 山田 孝子 副査 教授 菅原 和孝 副査 教授 田中 雅一 副査 教授 竹川 大介

人間・環境学研究科

氏 名	高橋 そよ
-----	-------

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、人びとが自然を利用する際に顕在化する生活戦略や社会経済的な活動、世界観などを含めた多様な側面に焦点をあて、自然利用という行為を総体的に解明することを目的とする。具体的には、沖縄・伊良部島の佐良浜集落のサンゴ礁資源を利用する人々を事例に、延べ合計約 18 カ月間にわたる人類学的フィールドワークから得られた一次資料と文献資料にもとづき、2 つの側面から検討するものである。第 1 は、民俗知識と生計活動について参与観察にもとづく資料から記述・分析し、自然資源への直接的な関与という側面であり、第 2 は、経済活動や信仰という社会生活がどのように資源利用に関わるのかという社会経済的側面である。

本論文は、全 8 章からなり、第 3 章以降を 2 つのアプローチにあわせて 2 部構成となっている。第 1 章では、これまでの沖縄を対象とする漁撈研究における本論文の位置づけを提示し、第 2 章では、調査地の自然環境や社会組織、現在行われている 15 種類の漁法について、概観する。

第一部「サンゴ礁資源利用と民俗知識」では、資源への直接的な関わり方を取り上げる。第 3 章では、どのように自然を理解しているのかを、海底地形や潮汐現象、風向に関する民俗知識、漁場名や魚名の命名法から検討する。サンゴ礁という自然環境上の特徴を反映した、魚や漁場に関する多彩な知識の存在が明らかとなっている。魚については 187 個の個別名が収集でき、魚が色彩や模様、生態的特徴によって弁別されるのに対し、形態や生息場所などの共通性によって「まとめられる」という命名法の特徴を指摘する。また、とくに漁場については、素潜り漁師の描いたスケッチマップを手がかりに、空間認識という点からの分析を試みる。その結果、描画には、魚の好む礁原の割れ目や藻場の広がりなどの情報ごとに区分線が描かれ、その重なりによって最後に地形の全体像が浮かびあがるという特徴を抽出する。描画の特徴をもとに、素潜り漁師の空間認識には、海に身体を投じて海底を直接観察するという漁のあり方が反映されることを明らかにする。

第 4 章では、潜水による漁法の特徴を分析し、漁撈集団ごとに漁法の組み合わせが異なるため、対象となる生物や利用する漁場の重なりが集団間で少ないことを指摘する。さらに、ある漁撈集団の活動を事例に、自然条件だけではなく、魚の価格変動に応じて漁法と対象を柔軟に切り替えるという漁撈活動のありかたを明らかにする。

第二部「水産資源の商品化と社会生活の諸相」では、資源利用をめぐる社会経済的、宗教的側面について考察する。第 5 章では、文献資料と島民を対象とする聞き取り調査から得られたライフヒストリーをもとに、水産資源の商品化と地域史を再構成する。佐良浜では、20 世紀初頭、日本本土での需要を受けて、カツオー一本釣り漁とかつお節生産技術が導入され、その後パラオや北ボルネオ

へかつお節移民が送り出されるなど、人々の暮らしは国家経済に包摂される過程そのものであったことを指摘する。漁撈という生計活動が政治経済的動態と大きくかかわるという、佐良浜の漁撈活動の歴史的動態を解明している。

第6章では、漁獲物の流通という問題をウキジュとよばれる取引慣行をもとに検討する。調査地では、漁獲物はセリではなく、仲買いと漁師との固定された関係によって売買される。佐良浜では、漁撈集団ごとに漁獲対象が異なるため、仲買いの扱う魚種には重なりが少ないという結果となっており、この取引慣行は、仲買いにあって過当競争を避けるために重要な意味を持つことを明らかにする。また、漁協に報告する漁獲高に対する買取金額と漁師への実際の支払い金額の定量的分析をもとに、仲買いの漁師への支払い金額の方が多く、この取引慣行においては、仲買いによるツムカギとよばれる思いやりと「おまけ」の行為がこの関係を支えるうえで大きな意味を持つことを明らかにする。これらの結果をもとに、仲買いの行動原理が貨幣による最大なる利益の追求というよりも、「商品」を供給する相手と買い手とのつながりの維持に対する努力にあること、そして、ウキジュは必ずしも経済的な価値に還元されず、社会的なモラルの共有によって維持されていることを指摘する。

第7章では、マジムヌとよばれる霊的な存在に対する島の人々の語りを取り上げ、漁師の信仰的なおそれが漁場を選択する際の行動選択の一つになっていることを明らかにする。ここでは、他者のまなざしを意識したモラルのあり方が、人びとの日常的な行動を律する基準として重要な意味をもち、サンゴ礁資源利用のあり方や漁獲物の取引慣行などにおいても反映されることを論じる。

第8章では、これまでの章を総括し、漁獲の不確実性や海の危険性への対応について考察し、詳細な民俗知識の蓄積、複数の漁法や漁場といった資源へのアクセスの多様化、特定の場所への象徴的な意味づけと一時的な禁漁という対処を人々がとってきたことを論じる。そして、取引慣行をめぐるモラルの共有や努力といった、社会関係の緊張や衝突を回避するための行為が、自然資源利用のあり方に影響を与えていることを総合的に考察する。最後に、資源利用という問題の解明には、自然認識や技術という資源への直接的なかかわり方のみならず、それを包摂する社会全体に対する視点の重要性を結論として提示する。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、長期間のフィールド調査にもとづく沖縄県伊良部島の佐良浜地区に暮らす漁民のサンゴ礁資源利用に関する人類学的研究である。従来、沖縄地方の漁民を対象とする研究において、漁撈技術、民俗知識、漁撈活動を支える社会経済生活、世界観など、人間の生態の諸側面それぞれが個別に研究対象とされる傾向にあった。これに対し、本論文は、これらが人間の生計を成り立たせるための営みとして、人間活動において相互に関係するものであるという視点に立ち、漁民のサンゴ礁資源利用を、サンゴ礁環境をめぐる民俗知識、漁撈活動における知識の運用、資源利用をめぐる政治性や社会経済、世界観など、生態から宗教にわたる総合的体系として描き出した点に特徴がある。

本論文の評価すべき点は大きく3つにまとめることができる。

第1は、サンゴ礁をめぐる民俗知識とその運用を、聞き取りと直接的参与観察をとおして実証的に明らかにした点である。漁撈活動においては、一般に対象とする水産資源に関する生態学的・動物学的知識、漁場の海底地形や地質、潮の流れなどの知識を総合的に活用して活動が組み立てられることが知られているが、本論文がサンゴ礁資源利用に特徴的な漁民の民俗知識を、とくに魚と漁場という点から実証的に明らかにしたことは学術的意義を持つものである。

たとえば、魚類は、サンゴ礁という環境を反映し、色彩や模様、生態的特徴によって、187の方名で弁別されること、そして、宮古島周辺の漁場として利用するサンゴ礁海域は、223カ所の地名(漁場名)で区別されていることが明らかにされている。また、本論文は、スケッチマップという手法を用いることにより、素潜り漁師による漁場の描画において、サンゴ礁の地形構造に注目した複数の区分線の重なりによって漁場全体が描かれるということを指摘している。漁場同士が鳥瞰的に認識されるのではなく、各漁場の位置はお互いの相対的な関係で捉えられ、継ぎ足すような形で描かれるという特徴をもつことを明らかにした。このように、彼らの漁場空間の平面的認識には、海に身体を投じて海底を直接観察するという漁のあり方が反映されることを実証的に示している。さらに、漁場における区分名は漁獲対象魚の生態と習性に関する知識が一体となって認識されており、このような民俗知識が、活動の場において実践的に活用されることを、漁撈活動の具体例をもとに丁寧に描き出している。

第2は、サンゴ礁資源を利用する潜り漁という漁撈形態が、今日まで静態的に維持されてきたのではなく、水産資源の商品化という歴史的、社会経済的動態のなかで、一つの生活戦略として選択されるにすぎないことを示した点である。佐良浜の人々の漁業が、沖縄全体をめぐる政治経済の歴史的変化のなかで、自給自足の経済から水産資源の商品化という経済的転換、その後、カツオ一本釣り漁の導入、戦前の南洋移民、アメリカ統治下の漁業復興、日本本土復帰後

氏 名	高橋 そよ
-----	-------

の沖縄振興開発計画実施という変遷を経てきたことを論じている。また、ここでは、島の人々の個人史に注目することで、彼らの漁業形態選択にみる時流性が生き生きと描写されている。

第3に、佐良浜の人々の漁撈活動や水産資源の取引慣行が、共同体内で培われてきた超自然観やモラルに支えられていることを明らかにした点である。たとえば、マジムヌという霊の観念が特定の漁場に利用が集中するのを回避させるという、漁撈活動と超自然観との連繋が伝承の考察を通して提示されている。特に秀でた点は、仲買いと漁師との固定されたウキジュという、水産資源の売買をめぐる取引慣行についての分析である。この取引慣行は1981年ごろから成立するのであるが、仲買人の買取金額と売上金額についての綿密な分析をとおして、この関係がツムカギ（美しい心）をふるまうとよばれる商売上の「おまけ」のやり取りを介して維持されることを実証的に明らかにした。ここには、利益至上主義の原理によっては動かされず、取引における期待の構造に「美しい心」というモラルが埋め込まれるという、取引慣行の実践例が見事に提示されている。

以上のように、本論文は、従来別個のものとして分析されることの多かった宗教と生態という問題を、相互に関係するものとして捉え、しかも人間の生態におけるモラル・宗教の優位性の問題を提起しようとした点で、独創的で、野心的な内容に富むものといえる。本論文での問題提起には、未熟さも認められるが、資源利用の人類学的研究の限界を乗り越える可能性を示唆するものと評価することができる。したがって、本論文は、人間と環境とのよりよい関係について総合的に考察する人間・環境学研究科にふさわしい内容を備えたものといえる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成20年7月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。